

# 横田基地 飲用井戸の停止検討

## 米で規制強化 外部の水に転換か

# 米軍、地下水浄化しない恐れ



横田基地内の飲用井戸とみられる設備  
＝東京都福生市で（松島京太撮影）

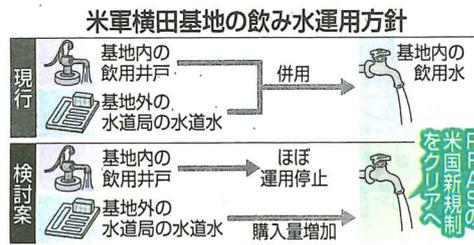
### PFASを追う

米環境保護庁（EPA）は4月、飲用水に含まれるPFASの一種のPFOSとPFOAの規制値を1リットル当たり4ナノグラムとし、これをクリアしなければならぬと定めた。従来は両物質の合計値1リットル当たり70ナノグラムを勧告値とし、強制力はなかった。新規規制は、在日米軍基地にはまだ適用されていないとみられる。米軍関係者によると、基地内の飲用井戸は12カ所

東京・多摩地域の水道水源の井戸で発がん性の疑われる有機フッ素化合物（PFAS）が高濃度で検出されている問題で、汚染源の可能性がある米軍横田基地（福生市など）が、米国の飲用水の新規制値を満たさないと、基地内の飲用井戸の運用停止を検討していることが、政府関係者への取材で分かった。厳しくなった新規規制で、米軍が地下水の除染や汚染源の特定に取り組む可能性があるが、その機会が失われかねない。

（松島京太）

米軍横田基地で2010～23年、PFASを含む泡消火剤などの漏出事象が計8回発生。12年発覚の事故では泡消火剤の原液約3千リットルが土壌に漏出したが、米軍は基地外への影響を否定している。都の地下水調査では、基地南東の約1キロ地点で、強制力のない日本の暫定指針値（PFOSとPFOAの合計値で1リットル当たり50ナノグラム）の27倍を検出。これは都内最高値。基地周辺の地下水は西から東に流れているとされ、都が19年以降に取水を停止した井戸40カ所は全て基地の東側にある。



基地の2021年版水質報告書では、井戸から浄化処理後でPFOSとPFOAの合計値が1リットル当たり51ナノグラムが検出されていた。米軍は、昨年3月に新規規制案が公表された際、在日米軍への適用を想定。飲用井戸の運用を止め、地元自治体の水道局の水道水で飲用水をまかなう案を同時に日本政府側に示した。基地内の飲用水は井戸と水道局の水道水を併用しているが、水道水が飲用水に占める割合をほぼ100%にし、一部井戸は緊急時に備えて維持する案という。都水道局は19年以降、PFAS濃度が高い水源井戸40カ所で取水を止め、多くの浄水施設でPFOSとPFOAの合計値は1リットル当たり5ナノグラムを下回っている。政府関係者は「米軍が水道水に切り替えることで新規規制をクリアできれば、米軍が積極的に地下水の除染に乗り出す必要性を失うことになる」と危惧。汚染源特定や地下水の除染が進まず、長期間にわたり汚染が放置される恐れもある。在日米軍広報部は取材に、井戸の運用停止に触れず、「横田基地と日本政府

米軍横田基地の飲み水運用方針

基地の2021年版水質報告書では、井戸から浄化処理後でPFOSとPFOAの合計値が1リットル当たり51ナノグラムが検出されていた。米軍は、昨年3月に新規規制案が公表された際、在日米軍への適用を想定。飲用井戸の運用を止め、地元自治体の水道局の水道水で飲用水をまかなう案を同時に日本政府側に示した。基地内の飲用水は井戸と水道局の水道水を併用しているが、水道水が飲用水に占める割合をほぼ100%にし、一部井戸は緊急時に備えて維持する案という。都水道局は19年以降、PFAS濃度が高い水源井戸40カ所で取水を止め、多くの浄水施設でPFOSとPFOAの合計値は1リットル当たり5ナノグラムを下回っている。政府関係者は「米軍が水道水に切り替えることで新規規制をクリアできれば、米軍が積極的に地下水の除染に乗り出す必要性を失うことになる」と危惧。汚染源特定や地下水の除染が進まず、長期間にわたり汚染が放置される恐れもある。在日米軍広報部は取材に、井戸の運用停止に触れず、「横田基地と日本政府



### 在独基地では除染新計画

米国の飲用水PFAS規制が厳格化され、ドイツでは汚染源と特定された米軍基地で、米軍が地下水の浄化を積極的に進めている。米軍準機関紙の星条旗新聞によると、米国で新規規制値が設定された4月、ドイツ南部の米軍アンスパッハ駐屯地では、地下水からPFASを除去する浄化装置を設置する新たな計画が始まった。日本政府関係者は「米軍が自分たちの飲み水を確保するためにも、環境改善に取り組んでいる」と指摘した。環境省によると、2012年以降、ドイツ政府が調査でPFASの汚染源として米軍5施設を特定した。

の間で現在、EPAの新規規制に伴う水道水購入について協議していない。新規規制が海外の米軍基地、特に在日米軍基地にどう適用されるか注視している」と回答した。市民団体「PFAS汚染を明らかにする立川市民の会」事務局の佐々木憲幸さん（68）は「汚染の原因をつきつたのなら浄化作業をするべきなのに、汚れていない水を買って対処するのは本末転倒であり、許せない」と批判した。

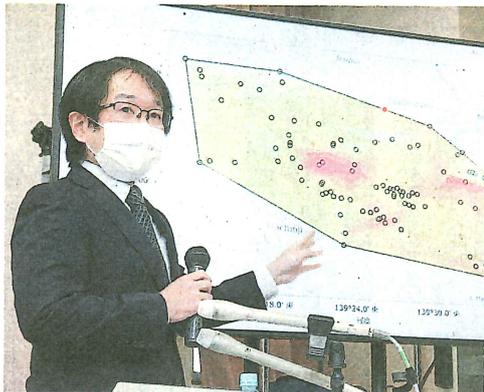
出典：「東京新聞」2024年6月9日付

# 地下水 市民団体と京都大が調査

## 横田基地付近で指針値62倍

東京・多摩地域の水道水源の地下水が発がん性の疑われる有機フッ素化合物(PFAS)で汚染されている問題で、市民団体と京都大の研究室が1日、多摩地域の地下水などに含まれるPFASを独自調査した結果を発表した。汚染源と疑われる米軍横田基地(福生市など)付近では、暫定指針値の62倍相当を検出した。基地から東に10キロほど離れた国分寺市の深い地点の地下水で、高濃度の分布も判明。基地付近の汚染が東に広がっている恐れがある。

(松島京太)

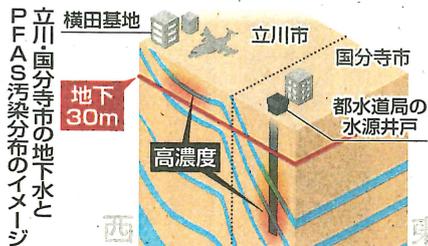


多摩地域の水質調査の結果について説明する京都大の原田浩二准教授＝1日、東京都立川市で(佐藤哲紀撮影)



詳しい汚染マップは「PFASを追う」特設サイトから

### 東側の深い層 汚染拡大か



PFASを追う

調査は、市民団体「多摩地域のPFAS汚染を明らかにする会」と京都大の原田浩二准教授(環境衛生

立川市、国分寺市の地下水とPFAS汚染分布のイメージ

学)が昨年12月～今年9月に共同で実施。多摩地域などの140カ所で地下水を採取して調べた。

これまでの都や環境省の調査では、採取地点の深さや詳しい場所が不明の例が多い。今回の調査では深さ30センチまでを「浅井戸」、それより深い所を「深井戸」として傾向を分析した。

調査結果によると、最も高濃度だったのは横田基地南東の立川市内の浅井戸で、1カ所あたり約3100

ナゲだった。都の2018年度調査で最高値とされた同1340ナゲを大幅に上回った。

基地の東側10キロ圏では、深井戸で濃度が高い傾向にあった。国分寺市では浅井戸(17カ所)の平均濃度が同24・8ナゲで、深井戸(10カ所)は5倍近い同123・4ナゲだった。

基地周辺の地下水はおおむね西から東に流れ、東に行くほど地層に沿って沈み込んでいくとされる。原田准教授は「国分寺市より西からPFASが流れてきているとみられる。(横田基地付近)立川市での高濃度汚染に関連しているのでは」と指摘した。

国分寺市の東窓ヶ窪配水

#### 用語解説

多摩地域のPFAS汚染  
 東京都などの調査では2005年から、多摩地域の広範囲の井戸で高濃度のPFASを検出。18年度には横田基地から約1キロ南東の井戸で指針値(1カ所あたり50ナゲ、1ナゲは10億分の1ナゲ)の27倍の濃度を検出した。都水道局は19年以降、PFAS汚染の影響で40カ所の水源井戸で取水を停止した。米軍横田基地では10、23年に計8回のPFASの漏出事故が起きたが、米軍は基地外への漏出を認めていない。

所では、19、20年に全水源井戸でPFAS汚染のため取水を止めた。配水所の井戸の深さは約200センチで、今回の調査結果をみても、今回の調査結果をみても、深い所での汚染の広がりが想定される。

移動速度が比較的速いPFASのHXSを高く検出。原田准教授は「後からPFASの一種のPFOSなどが流れてくると考えられる。最も中心的な汚染地域で早く対処しないと、汚染がさらに拡大する恐れがある」と指摘した。